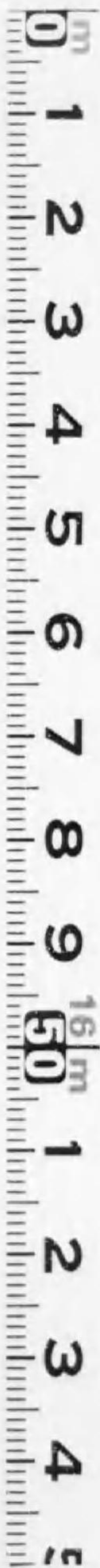
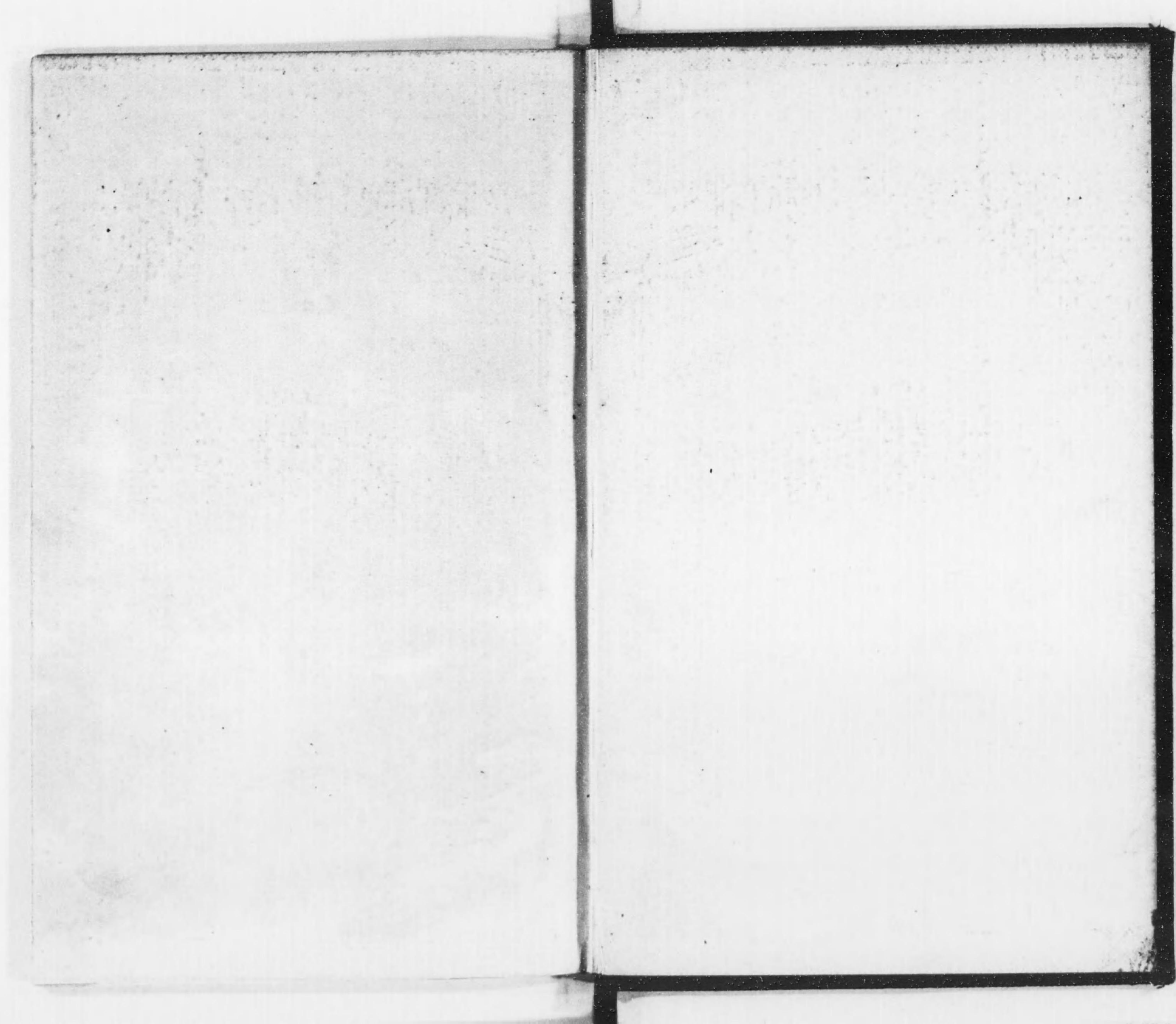


503

20

始





503-20

愛國婦人會長 從三位下田歌子先生贊
東京女子高等師範學校教授文學博士下田次郎先生贊

參謀總長元帥陸軍大將子爵上原勇作閣下述

國

と

女

芹澤登一

大正 10 11. 3
編 内交

小波巖谷季雄先生序
陸軍少將矢木亮太郎閣下序

東京日本家政協會



大正十年五月

參謀總長元帥陸軍大將上原公爵作勇閣下



星

芥澤登一君

參謀總長元帥陸軍大將上原公爵作勇閣下

我が婦人界の思潮も、時勢の推移に伴ひまし
て、近年著しく進んで参りましたのは、まことに
慶ぶべきことでありますが、併し、その半面に従
來日本婦人の美德として稱へられてゐたもの
を漸く喪失するやうなことになりはしないか
といふ憂ひがないでもありません。
願ひますれば、曩には乃木大將夫人の崇き殉
死あり、近くは尼港に於ける石田領事夫人の壯
烈なる最期あり、これ武士道に對する日本婦道

の龜鑑といふべきものでありまして、わたくしは、これらの事蹟に依りまして、日本婦人の胸には、尊い犠牲的精神の尙ほ炳として光を放つて居ることを認めますとともに、また大に心強くも感ずるところであります。

さりながら、廣く世間一般の實際を見ますと、斯くの如き觀念、即ち奉公義勇道とも名づくべき路上には、何うやら草が生えて來たかの觀があるのてございませぬ、此の大道に草が生えては、正しく國家の一大事であると申さなければな

りませぬ。斯ういふ大切な道へ、かりそめにも草などの生えないやうにするのには、常に聲を高くして、大に日本婦道を鼓吹しなければなりません。

わたくしどもの若い時に遡つて考へますのにも、と自分の父は、美濃の小藩の士で夙に勤王をととなへまして、王政復古の爲めに微力を盡しましたとともに、非常な壓迫を受けて、一通りならぬ艱難辛苦を嘗めました。わたくしは、此の困苦の有様を幼少ながらも眼のあたり見て居

りましたので、若し一朝事があつたら、女ながらも起つて奉公の誠を盡したいといふ精神が、自ら胸の奥深く刻みつけられたのを感じます。其を考へますと、我ながら往昔の我に恥づるやうの感が湧き起ります。

そして、今日の我が婦人界の状態を見ますと、動もすれば泰平の夢に入らんとして居るやうで、甚だ心配に存じます。日本は曩に聯合國の一員として、世界戦争に参加したと申しまして、戦争の刺戟を受けることは僅少で、殊に歐洲

の惨禍の如きは目前に見て居ないのでありますから、之れに依つて其の精神に鍛練を加へられたといふやうな事は、殆んど無かつたのであります。

此の秋に方つて、上原大將の述べられた婦道は、日本婦人の國家的覺醒の上に、多大の刺戟を與へるもので、所謂世の眠を覺まさせる木鐸として、頗る有益なものであると信じます。殊に、これが日頃女子教育に従事して居るものなどの唱道でありますれば、我田引水の説と見られ

て感應が割合に少ないかも知れませぬが、直接婦人の教育に關係のない參謀總長の唇から之を聞くに至りましては、その人をして推服せしむる力が又別に大に加はるものがあるかと考へます。且又是を記し之を刊行して、斯道の爲めに盡さるゝ芹澤君に深く感謝の意を表するのであります。

わたくしは、此の書の如きは、我が日本婦人の成るべく多くに讀ますやうにしたいと思ひます。而して、美しい我が日本の婦道の上に、かり

そめにも草などの生えないやうに、努力精進せんことを切に望みます。

大正十年五月

下田歌子

序

文事ある者必ず武備あり、武備ある者又文事ありとは、本書の編者芹澤君が曩に「獨逸の肉弾」を譯述した時、余の之に題した一節である。然るに同じ芹澤君は、今度また感ずる所あつて、上原大將の婦人論を「國と女」と題して小冊子とし、之を公にする事となつた。於此余は又前言を繰り返し、否、更に之を敷衍して、武的健兒を率ゐるの人は、文的賢婦を養ふに足る、硬軟兼備

の名將たるに、一層畏敬の念を深くした。加ふるに同窓の舊友たる我が芹澤君は、當年乃木大將家の家庭教師として、親しく乃木夫人の人格に接し、其婦徳に少なからず感激して、爾來十年間、本務の寸間を割いては、各所の女學校、教育會等に、賢母の龜鑑たる夫人を、遍く紹介して倦まぬ程の熱心家である。今この人に依つて、大將の所説が公にせられる事となつた。其間全く共鳴する所のある爲めなるは、元より論を俟たぬであらう。

蓋し、我邦の婦人界は、現に覺醒を要するの秋に在る。但し、俄かに枕を蹴つて立つものは、動もすれば戸惑ひの危険を招く。此際に當つて此書の如きは、靜かに其手を取つて、更衣を助け、洗嗽を教へ、以つて健全なる新生に入らしめるものではあるまいか。

大正十年六月

裳の衣

序

編者芹澤登一君は余が竹馬の友なり。君夙
に獨逸法學を修め、深く泰西の智識を藏す。會
て、白耳義領事館及び陸軍通譯官たりしことあ
り、中學に教鞭を執りしことあり、又乃木大將の
知を得て、其の家庭教師たりし事あり。君今や
實業界に其の材幹を伸べて、數會社の重役たる
も、亦二十年來、東京市の名譽職に擧げられ、大に
公共の爲めに盡瘁す。其の經歷斯くの如く、以

て其の人物の如何を知るべきなり。君や牙籌に敏なると共に、又文筆に通ず。曩に歐洲大戦の初期に於て、『獨逸の肉弾』を譯述し、當時未だ能く知られざりし獨逸軍の内容を傳へて、畏くも天覽の光榮を荷ふ。殊に君は、乃木夫人の徳風追慕の事よりして、深く婦人問題に意を注ぐに至り、忙餘之が研究に力を致す事多年、穩健適切なる君の所謂女子道を各地に講説して、熱心倦まず。君が尋常の才人に非ざる、以て察すべきなり。

君頃者、婦人界の思想渾沌として其の傾向の頗る憂ふべきあるを見、曾て上原大將の説かれたる婦人論を公刊し、以て之が覺醒に資せんことを余に謀る。夫れ國家盛衰の要機は主として教育の如何に在り。而して教育の根原は、家庭の母に存す。上原大將の力説さるゝ處は、實に國家の將來と、母たる者の關係にあり、即ち、双手を舉げて君が企圖を賛成せし所以なり。輓近世運の進展に伴ひ、嘗に教育のみならず、婦人に關する事業にして、未だ計畫せられざる

もの多しあり。余は君が更に進んで是等の爲めに其の努力を分たれんことを冀ふものなり、一言を述べて序となす。

大正十年仲夏

陸軍少将 天本亮太郎

拾年を記念して

明治大帝の御登遐、それに次ぐ乃木大將夫妻の殉死、この日本國民の心魂を貫いた我が國家の絶大事は、今や既に十年の昔となりました。光陰矢の如しとは申しながら、思へば實に早いものであります。

私は、會々乃木家の家庭教師として、勝典保典兩令息教育の任にありましたから、親しく大將夫人の馨咳に接して居りました爲め、夫人が殉死された後、今更の如く賢母の典型であられた

夫人の徳風を追慕するの念、そゝるに切なるものがあつたのであります。

故を以て、爾來各地の教育會、師範學校、高等女學校、小學校、婦人會、處女會その他諸集會の希望に應じまして、乃木大將夫人に關する講演を致し、常にその遺徳を傳へることに微力を盡して來ました。其間實に十年に及んで居りますけれども、何分忙しい本務の餘暇にすることでありますから、數を重ぬること僅に百餘回に過ぎません。内その主なるところを挙げますれば、

北海道廳札幌教育會

北海道廳札幌高等女學校

巖手縣教育會

巖手縣師範學校

巖手縣高等女學校

巖手縣水澤實科高等女學校

宮城縣高等女學校

福島縣師範學校

千葉縣飯高婦人會

東京市女子學院

東京市日本弘道會

神奈川縣片瀨村雲婦人會

新潟縣長岡市通俗婦人講演會

新潟縣長岡高等女學校

新潟縣見附處女會

島根縣松江市教育會

島根縣師範學校

島根縣高等女學校

岐阜縣女子師範學校

岐阜縣高等女學校

京都市教育會

京都市高等女學校

和歌山縣師範學校

山口縣豐浦高等女學校

大分縣女子師範學校

大分縣高等女學校

熊本縣高等女學校

福岡縣福岡高等女學校

宮崎縣都城高等女學校

宮崎縣都城將校婦人會

宮崎縣宮崎高等女學校

鹿兒島縣女子師範學校

鹿兒島縣高等女學校

等てあります、而して初めのうちは、専ら同夫人に關する講話のみに止まりましたが、中頃から、は、時代に關する婦人問題の私見を加味して講述し來つたのであります。然るに、輓近歐洲大戰の生んだ思想界の世界的波動は、我が國の婦人社會にも及ぼし、新らしき婦人と稱せらるゝ人々を中心として、所謂婦人解放の運動が起つて來ました。その餘弊たる個人本位の過激思想も亦之に伴うて次第に蔓り、甚だしきは國家を無視し、國體をも尊重せ

ずとまで、放言するものさへあるやうになりまして、爲めに貞淑溫良にして犠牲的精神に富める日本婦人の美風は、日に漸く蝕まれんとするの傾向を生ずるに至つたのであります。此の秋にあつて、自分が偶然に想ひ起したのは、曩に伯爵松平直亮閣下の紹介に依り、島根縣松江市教育會に於て講演の時發表しました、上原大將閣下の婦人論でありました。それは大將が國家本位より婦人の職能を説かれたもので、曾て陸軍教育總監として、特に婦人問題までも研

究せられた結果から出た意見であります。この大將の所論は、現代に於ける婦人の思想問題を講究する上に、参考として資することが尠くないと思ひましたから、茲に「國と女」と題し之を上梓して、廣く世に傳へんとする次第であります。

婦人問題は、決して單なる婦人間の問題のみではありません、社會問題として、國家問題として、極めて重大な地歩を占めてゐるものであることを信じますが故に、私は、この小冊子の讀者

に對して、特に最も眞面目なる熟讀と考慮とを仰ぎたいのであります。

大正十年初夏

芹澤登一識

謝 言

- 一 本書の公刊に際し、下田歌子先生、下田次郎先生、巖谷小波先生、矢木少將閣下が特に好意を寄せられ、多忙の時間を割きて懇篤なる賛序を贈られたるは、編者の最も欣幸とするところにして、茲に謹んで感謝の意を表す。
- 一 巻頭に挿入せる上原將軍の寫眞は、曩日編者に賜りたるものを活用せるものにして、此機會に於て之を掲げ、讀者をして清話と共にその清容に接せしむるを得たるは、編者の亦最も欣快とするところなり。
- 一 序文の署名は、各先生が特に本書の爲めに其自署を賜りたるものなり。

國 と 女

- (一) 國家の將來と女性
- (二) 大戦後の歐洲婦人
- (三) 母の自覺と次代國民の教養
- (四) 女性の責任
- (五) 歐洲の乃木夫人
- (六) 艱難は最上の教育者
- (七) 佛國の中産階級
-
- (八) 佛國婦人の眞面目
- (九) 我が日本婦人と國難
- (十) 議會に於ける獨國宰相の答辯
- (十一) 女學校卒業者の希望と實際
- (十二) 我が家庭に於ける母の地位
- (十三) 新日本と母
- (十四) 我が邦婦人の覺悟

國と女

はしがき

私は當時上原大將閣下にお願ひすることがありまして、數日中にその書類を整へてお伺ひするやうにお約束をして置いたのであります。が急に旅行することになつたために、此のお約束を歸京の後に延ばさなければならぬことになつたのであります。そこで私は大將をお訪ねして右の旨を申出ました。

ところ何地へ行くのかといふ事を問はれましたの
で、實は松江市教育會で乃木大將夫人の講演をする
ために急に參ることになりましたと申しましたら、
大將は「君は忙しいのにさういふ事をするのは時節
柄奇特のことだ、就ては自分も聊か婦人問題に關し
て考へてゐることがあるから話さう。」と言つて恰
も炎暑中の午後約そ三時間に亘り、而も引きつゞい
て來られた五六の訪問客が應接室に待つて居られ
るにもかゝはらず、諄々として熱心に説かれたのが、
即ち左記の婦人觀でありました。而して、大將はそ
の話を終つたあとで、「君は五月發刊の女の世界」淑

女畫報「六月の中央公論」に斯く々々のことが書いて
あるのを見たか。」との注意があつたのであります。
私はそれに氣づかなかつたのを恐縮すると共に、大
將が日々繁劇な要職にあつて、尙ほ且斯の如き月刊
雜誌をも精讀されつゝある其の用意に感嘆措く能
はず、「閣下は御繁務の中でよくそのやうな他方面
のものまで御披見がてきますね」と申しましたら、
大將は「うむ、本を讀まないと若い者に負けるから
ね」と微笑されましたので、重ね々敬服して退い
たやうな次第でありました。
私は直ちに旅程に上り、松江市に參りまして、事の

序に右の趣を話ししましたら、市長は非常に感動して、是非とも大將の談話を披露してもらひたいといふ強つての懇請に、私も至極有益なお話と考へ、又折柄戦時中でもありましたので、一面日本の參謀總長は、斯くの如き點までも能く研究を盡して居られる方であるといふことを、内外に知らしむる光榮に浴したかつた爲め、擅にも早速快諾致しまして、なるべく大將の話されたところにたがはないやうに勉め、私

が之を講述するに至つたのであります。而して本書は、右松江市教育會に於て、私の講述したところを筆記した草稿に補修を加へたものであ

りますが、今回之を發表するに方り、大將は親しく校閱の勞を拂はれ、剩へ其末尾に最近の感想を添附せられたるは頗る光榮とする所であります、けれども鈍才にして説明到らず、殊に措辭洗練を缺いて蕪雜に流れ、折角の大將の高見を汚す廉の多いのは、まことに赧顔にたへませんが、而も大將の説かれた精神に至つては、深い感激を以て之を傳へて忠ならんことを期しました次第であります。

(編者記)

一 國家の將來と女性

國といふものは、男と女とて組織されて居る、假に七千萬人の國民とすれば、約そ半數づゝの男女で國家を維持して行く譯である。男ばかりでもいけなければ、又女ばかりでもいかず、兩相俟つて初めてそこに國家發展の基礎が形造られるのである。而して、その婦人の任務たるや、まことに重且つ大なるものであるが、さて我國の婦人の如きは、果して能く此の自己の責

任ある仕事を完うしつゝあるや否や、頗る疑問である。自分は、我邦の女は一般に男と比較し、個人として其能力を發揮する上に於て、又國家に對して其の任務を果す上に於て、格段の懸隔のあることを認めざるを得ないものである。故に、大に婦人の向上進歩を計つて、而して男子に對立するだけの實力を發揮せしめると共に、男子も亦之を認めて相當に敬意を表して行かなければならないと思ふ。

殊に我國に於ける風教上の破壊は、専ら男子

の行爲に其原因を置いて居ると斷言して憚らない。斯くの如き弊害を矯正し、一國の風教を振肅するのにも、婦人の力が偉大になつてくれれば、自然に改善されるべき性質のものであらう。何れにしても、我が婦人にして若し自己の意見を主張せんとする場合は、己れ先づ其の責任を完うして、而して後之をすることが至當であらうと考へるのである。

婦人の任務を擧げ來らんか、人類の一員として、國家の一員として、又家庭の一員として、頗る

多端である。就中家庭の支配者として、第二の國民たる子女の訓育に當るといふことは、婦人の任務中の最も大なるものであつて、又最も誇りとすべき仕事であると言はなければならぬ。凡そ國民の教育は、その源實に家庭に存して居るのである。若し夫れ一家の主婦にして其の人を得なければ、家長たる男子が如何に立派な人物であつても、内齊はず、家政は亂れ、爲めに堅實なる子女の教養の如きは、到底望み得られな

い事になつて、その結果、直ちに國運の消長に關

することになるのである。蓋し國家の興隆は
獨り男子の努力のみを以て期し得べきでない、
其の半面は慥に婦人の應助に俟たなければな
らないのである。

婦人問題は、國家の將來にとつて、頗る重要な
題目である。

つらく考へて見るのに、我が日本の將來に
向つて痛心に堪へないのは、實に吾人が國家及
び社會の爲めに希望する婦人を、前途如何にし
て得らるゝかといふ問題である。此の事柄に

ついては、今にして充分の調査研究を進め、以て
適當なる方策を樹つるにあらずんば、終に悔い
るとも及ばないやうなことに成りはしないか
を慮れる。

二 大戦後の歐洲婦人

歐洲の天地は、現に四境を通じて修羅の巷と
化し、何れの國民も上下を擧げて皆共に戦亂の

渦中に艱難を極めて居るが、而も此の慘愴悲愴なる戦争の有様を見て、國家社會及び人類の爲めには如何なる辛酸も敢へて意とすべきにあらず、何所までも奮闘努力しなければならぬといふことを愈切實に感じたのは、單り戦線に立つて銃劍を手にしてゐる男子ばかりでなく、戦列の外にある婦女子にあつても、亦同様の感動を與へられつゝあることゝ思ふ。而して、彼等の此の戦争から受けた感動たるや、たとへ、四圍の狀況から止むを得ず奮闘すべく餘儀なくさ

れたとしても、自ら一つの習慣性と化し、終生牢記して忘れられない極めて深刻なものであらうと察する。殊に婦女子にあつては、將來國難の場合を想うて、擁護の衝に當るべき次代の國民を、意志の堅固な、義勇に富んだ、立派なものに作りあげなければならぬといふ感情を愈強めるに至るのは、蓋し當然のことであらう。されば現在の歐洲の女は、相共に母として益々立派な第二の國家の柱石を作りあげなければならぬ重大な責任あることを、現に彼等が嘗めつ

つある困難と苦痛から最も痛切に自覺してゐる事と信ずるのである。

三 母の自覺と次代國民の教養

歐洲の婦人が、斯様に鞏固な自覺を爲した上は、今後如何なる方法に依つて、その子を育て、行くてあらうかを想像するに、たとへば他日兩性の子供等が、其の母の命ずる事に對して、若し

苦痛を訴へるやうなことがあらうか、母はさういふ時には必ずやその子に向つて、自分たちが曾て國難に遭遇した場合の困難に比すれば、汝の云ふやうな事は實に些々たるものである、斯くの如きことにだに堪へられないなら、到底將來國家の爲めに盡すべき有爲の人間にはなれぬと、父兄が嘗めた艱苦の状況を詳細に引證しつゝ、熱涙を揮つて懇々誠め諭すに相違ない。茲に至つて、子供等は翻然として自己の誤つて居た事を悟り、唯々として母の言葉に従ひ其の

心を正して行くこと、思ふ。而して、其の母が死んだ後はどうするかといふと、其の子は他日親となつて、又其の子に對し、勝つたときの苦痛と、敗けたときの惨状とを對照して言ふであらう、汝等の祖父母は國難に際して、非常なる艱難を嘗めたのである、それらの經驗に依つて、吾等の父母は親しく吾等を薰陶されたのである、その薰陶あればこそ今日あることを得たのである、汝等もよく祖父母の苦勞を思つて、大に努力するところなかるべからずと。斯くの如き訓

言は更に其の子が親となつて、又自分の子を誠むる場合に用ゐられることとなり、その子より又其の子へと順次反覆して行く事になるのである。斯の如き母の訓言を常に耳にして人となつた者は、自ら義勇奉公の精神が熾んで、能く國家の柱石たる素質を有するのである。是れ畢竟するに母たるものが、國家の爲めに堅實なる次代國民の必要なる事を、最も切實に感得した結果であると言はなければならぬ。

四 女性の責任

自覺した忠良な兵士は、忠良な母より出て、誠實なる國民は、誠實なる母に依つて養はる。正行の如きも、彼の賢母なかりせば、能く功名を爲し得たてあらうか、乃木伯の子息等も、彼の賢夫人の手に育てられたればこそ、父の子として能く美名を残すに至つたのである。故に母として、次代國民教養の任に當つては、能く國家の將來といふ事を考へて、堅實の上にも堅實なる心

かけを要するにもかゝらず、徒らに個人的の享樂を追ふことにのみ汲々として、國家及び社會の爲めに奉仕すべき觀念を逸し去らんとするが如き婦人のあるに至つては、まことに憂ふべき事である。

近來我婦人の間にも、泰西の思潮に感激して、大に其意見を主張するものあるは、悦ぶべきことなれども、動もすれば歴史、風俗、習慣等我國の美點を忘却して、漫りに婦人の權利を伸張せんとするの餘り、自由、解放等に名を籍りて、往々婦

人としての本分を没却せんとするが如き言説
行はれ、甚しきは貴族富豪の子女にして、背徳の
行爲を敢てするものが、頻々として輩出するに
至つたのは、誠に遺憾に堪へない所である。察
するに此の如きものゝ胎内より出て、斯の如き
ものゝ手に依つて養はれたる兩性が、共に國防
に當るものとせんか、一旦緩急ある場合に於て、
如上の自覺したる歐洲婦人の許に訓育されし
ものと對峙せば、其結果たるや、蓋し思ひ半ばに
過ぎないであらう。茲に至り、自分は一念國家

の將來を思ふ毎に、國運の消長は女性の人格に
待つところの座ろに大なるものあるを痛感せ
ざるを得ない。

五 歐洲の乃木婦人

此の大戦の試練を受けた、歐洲婦人の今後に
ついて考へて見るに、彼等のうちには、彼の慘憎
を極めた戦争の苦い経験からして、わが乃木夫

人が國家的精神を以て、子息の教養に當られたのと同じやうに、その次代の國民を育て、行かうといふ感想を抱くに至つた人も、蓋し少くないであらう。否寧ろ擧つてと言ひ得らるゝであらう。素よりその質量に於ては、乃木夫人に及ばぬかも知れないけれども、而も其數に於ては夥しく多數であることは、何人も否み得ないところであらう。併し今日我が日本に於て、乃木夫人に等しい精神を持つてゐる婦人が果して幾人かある、而も歐洲にあつては、一人としての

量は少ないかも知れぬが、その數に至つては何千萬人居るか、殆んど算へることが出來ないくらゐであらう。斯る多數の婦人が相共に覺醒して、次代國民の教養に當る場合に想到し、翻つて我國の現狀を顧ると、吾輩は轉た寒心にたへないのである。

六 艱難は最上の教育者

凡そ人として其の志を琢磨する上に、艱難より切實な功果を及ぼすものはあるまい、まことに艱難は最上の教育者である。自分の事を言ふのは甚だ烏滸がましいが、もと自分の家は頗る貧弱なものであつて、自分は子供の時、朝早く起きて學校へ行き、勉強して家へ歸つてみると、母は片袖を脱いで、絲引車を前に引きよせ、ぶらんく〜と一生懸命に糸を紡いで、それをまた自

分て機にかけて、織つては着物にして着せてくれたものである。そして母は毎朝早く起きて家事の爲めに絶えず立ち働らき、夜は遅くまで薄暗い燈火の下で針仕事を爲し、自分を育てるために非常な苦心をしてゐられるといふことを、自分は當時子供ながらも深く腦裡に刻みつけられ、成長の曉には、何とかして此の親の苦勞、此の親の恩義に報いるところがなければならぬ、といつとはなしに思ひ浮べた次第であつた。恐らく自分が今日あるのは、實に母親の厚

き賚であると思ふのである、而して自分の心を卒直にいへば、母は我が家の良妻賢母であつたと信じるのである。

編者申す。此の講演筆記が松江市の新聞に掲載された時に、大將は此の一節の如きは單に一座談としての内輪話に過ぎずかゝる事を多數の人の前に述べらるゝは甚だ迷惑なれば、若し更に他に傳へられでもする際には、取り除くことを望むとのお話をしたが、自分としては大將の説かれる賢母論の論旨を、聽者に徹底せしむる上に、此の一挿話は頗る重要な

役目を勤めるものゝやうに思ひますので、大將の迷惑を顧みず、其のまゝ之を茲に残して置いた次第であります。若し此の一節が多少とも大將に煩累を及ぼすやうなことになりましたら、その罪は一に編者にあります。

七 佛國の中産階級

近頃佛國の雜誌で見たが、同國の中産階級には、金持で遊んで暮らして居るものが多數ある、

そこで、是等の子供等は常に親のぶらくして居る行動を見つゝ成長したゝめ、自ら其感化を受けて何等の緊張味を帯びないから、將來勤勉の民となるものが尠ない。之に反して、三流階級のものには、必要から餘儀なくされるのであるけれども、兩親の絶えず働いて居る有様を見て、進取の氣象が自然に腦裡に刻み込まれ、終生勞務を厭はないといふやうになる、要するに勤勉の親の子には、精勵の民を見るけれども、放縱の親には遊惰の子供が出来るのは、國の爲め痛嘆

に堪へないといふことが書いてあつた、誠に其通りであると思ふ。翻つて我國の近狀に想ひ及せば、省みて憮然たらざるを得ない。何にしても、身みづから難艱に由つて教へられたものは、その印象極めて深く、骨に徹して忘れ難いものであるから、同じ決心にしても、同じ覺醒にしても、さういふ體驗のないものに比べると、その根柢に著しい相違があるのである、身みづから經驗をしないものにあつては、理智の上、に於て、斯うしななければならぬ、彼様しなけれ

ばならぬ、といふ考へがついて居ても、動もすればそれが上^ままりをして、實際に之^こを行^なふ力が缺^かけがちなものである。されば、経験のないもの、若^わしくは経験の少^{すく}いものは、堅^{かた}い上^うにも堅^{かた}い覺^{かく}悟^ごをし、充分の上^うにも充分の努力^{どりよく}をするやうにしなければ、とても體驗のあるものに及^{およ}ぶことは出來ない。

八 佛國婦人の眞面目

今^{いま}假^{かり}に、佛^{ふつ}蘭^{らん}西^{せい}の婦^ふ人^{にん}と日^{にっ}本^{ぽん}婦^ふ人^{にん}とを比較^{ひかく}してみやう。

多くの人は、佛^{ふつ}蘭^{らん}西^{せい}の婦^ふ人^{にん}は、華^わ美^びを好^{この}み非^ひ常^{じょう}に贅^{ぜい}澤^{たく}であつて、歐^{おう}洲^{しゅう}第^{だい}一^{いち}の美^みを誇^{たか}つて、更^{さら}に家^か事^じを顧^こみないもの、如^{ごと}く觀^{かん}てゐるやうであるが、自^じ分^{ぶん}が五^ごヶ年^{ねん}間^{かん}佛^{ふつ}蘭^{らん}西^{せい}の學^{がく}校^{こう}や田^{でん}舎^{しゃ}の聯^{れん}隊^{たい}や其^{その}他^たに居^いつた時^{とき}の見^{けん}聞^{ぶん}から判^{はん}斷^{だん}すると、佛^{ふつ}國^{こく}の婦^ふ人^{にん}に對^{たい}し右^{みぎ}の如^{ごと}き批^ひ評^{へい}を下^{くだ}すのは、それは

單に巴里に於ける婦人ばかりを見た一面の觀察に過ぎないのである。蓋し巴里は世界の貴紳富豪が夫人令嬢を携へ、贅を盡して遊びに来るところであるから、巴里の佛國婦人は自らそれらの風に感化せられて、その幾部分は華美贅澤に流れて居るやうに思はれる。併しながら、之を以つて佛國の婦人の全班を推斷するといふことは、頗る當を得ないこととて、輕卒な皮相觀たるの誹を免れることはできまい。

自分が親しく觀察した判斷に依ると、佛國の

婦人は概して中々眞面目で、徒らに服裝の贅澤に浮身をやつすやうなことがないのみならず、勤儉貯蓄能く家政を整理してゆく風がある。これは英獨婦人に比して決して譲らないであらうと信ずると同時に、自分は佛國に於ける潜在力は、都會よりも寧ろ地方にあることを確く信ずるのである。現に今度の戦争に於て、獨逸は非常な勢で進撃して來たけれども、佛軍を中堅とする聯合軍は能くこれを防いで、次第に強味を加ふるに至つた。これは恐らく斯の如き

佛國の内部に蓄積された潜勢力が、漸次外に現はれ來つた結果でありはせぬかと思ふ。察するに、此の潜勢力の素地たる各地方の家庭に於て、眞卒に、着實に、其の本分を盡しつゝある婦人らが更に泰平の夢から覺めて、復び外敵の侵入を受けけるやうな事がないやうに、相警めて共に發奮するに至つたならば、その實績や蓋し刮目して見るべきものがあらう。

九 我が日本婦人と國難

斯く考へ來つて、さて、我國の現在及び將來に對する婦人の感想は何うであらうかと顧みるに、遠く日清、日露の役より、近く日獨戰役に至るまで連戰連勝し、ために我が國が一等國として、世界列強の班につらなるまでに發展したことは、無論承知してゐるだらうけれども、今日の國運を打ち拓くまでに至つた戰勝なるものゝ、その裏面に於ける慘愴悲愴の實情を知り、これが

ために、如何なる困難と犠牲が拂はれたかといふ事の真相を理解して居る婦人は、恐らく餘りあるまいと思ふ。

凡そ戦争なるものは、頗る惨烈なものであるといふ概念は、誰しも持つて居るところであるが、而もその實際の事は、自ら戦闘に従事したもののか、或は親しく戦亂の渦中に立つたものでなければ、男子といへども、その苦痛の程度を察知することゝができなからう、況んや、概して斯の如き觀念に乏しい婦女子にあつては、尙ほさら深

刻な感情を持つことのできなないのは無理もない話である。

我が國の近代の婦女子は、戦役に際會するといつても、毎に勝つて居る戦争ばかりで、戦へば勝ち攻むれば奪る、恰も枯木を挫じくやうに易易たるもので、何等婦女子に俟つところがないやうに考へて居るくらゐであつて、その惨憺たる戦闘の状況については、何れも皮相の觀にとどまつて居る。殊に、いつも戦争といへば、皆海を隔て、行はれたもので、それも我を讃へ彼を

貶しめるやうな誤りたる新聞通信などに依つて、其の状況を知るだけのことであつて、之が實況を直接に言ひ傳へる人は、彼の日露の役に於てすら、滿洲の野に出征した僅々八十萬人を超えない、則ち今の全國の人口七千萬人に對比すると、約そ百分の一少し上くらゐの人が戰鬥に従事した譯で、それが凱旋してから漸く語り傳へたに過ぎないのである。

これを要するに、我が國の近頃の女は數度の國難に際會しては居るものゝ、戰亂の地とは常

に遠く隔てゝゐて、殊に勝戦がつゝいた爲めに、國難に對する覺悟の上に深刻味が足りない感がある。従つて、その子を養育して行く點に於ても、彼の前述の如き歐洲の婦人が、自ら直接に戰亂の苦痛を嘗め、擧つて國難を痛感したのに比較すると、妻としての自覺の上に、母としての覺悟の上に、少なからざる差違がありはせぬ歟。之れは單り婦人間の問題ではなく、苟も國事を念ふものは、深く慮るところがなければならぬいと考へる。

十 議會に於る獨國宰相の答辯

獨逸の宰相は、その議會で、戦争の爲め國民があらゆる方面に於て非常な難境に陥つて居るといふ苦痛を訴へられたのに對し、直ちに應酬して曰く、「諸君は、獨逸が千八百七十年代以前、即ち普佛戦争以前に於て、多大の困難を感じて居た時と比較したならば、今日の苦痛は忍ぶに難からず、況んや國家存亡の危機に際せることに於てをや」と。さしも議論の多い議會でも、

此宰相の答辯に對して、誰れ一人再び攻撃の矢を放つものがなかつたといふことである。斯くの如き苦痛國難に耐へる努力は、單り獨逸のみのことではない、佛國に於ても、白耳義國に於ても、また英國に於ても、敢へて差異はなかつたのである。歐洲の交戰國は、皆共に深刻なる國難の苦痛を嘗めて、其の意志の鍛練を加へたのであつた。然るに、我が國は何うであるかといふに、交戰國の一員として之れに参加はしたが、地理上、今次の戦争の中心に遠ざかつて居

た爲めに、戦亂の影響を蒙ること少く、國民の氣分は軍國とは思はれない位で、殊に婦人の如きに至つては、更に歐洲婦人のやうな緊張味を示さず、悠々として春夢に耽つて居る感があつたのである。

十一 女學校卒業者の希望と實際

此の頃の新聞で知つたことであるが、某女學校で、校長が其の卒業生に對し將來の方針を尋ねたのに、其の多くは、外交官、政治家、實業家、優秀なる陸海軍將校等に嫁したいといふ希望を持つて居るとのことが書いてあつたといふ。これは、相當の教育を受けた女子として、其の向上發展を望む上に、斯ういふ考へをもつてゐるといふことは尤に思ふが、さて嫁してから後の行

ひは何うであるかといふに、妻の本分に對して、眞面目な考慮を缺き、その意とする處は一に流行を追ふこととして、暇さへあれば浮薄な雑誌や小説などを讀みふけり、又夫を誘うて散歩に出かけ、或は芝居見物にても屢々行かなければ、満足の出來ないやうな人が少なくないやうである。これは、誠に慨嘆に堪へない次第であつて、斯くの如き風潮にして其歩を進めんか、これまで所謂武士の妻に依つて代表されつゝあつたやうな、溫良貞淑にして奉公的精神に富んだ日本

婦人の美點は、次第に去つて地を拂ふに至るてあらうと思はれる。歐洲の婦人が、能く戶外に出て遊ぶのを見て、その家庭に於ける勤めを怠るが如き感を懐くものもあるやうであるが、決して然うでない。彼れには、素より或る弊は免れないけれども、概ね家に在つては、夫を扶け、家政の整理に勉め、また暇があれば靴下を編み、着物を縫ひ、綻びをなほし、釵をあて、少しも無駄な時間を出さないで、何彼れとなく立ち働く、而して、遊ぶべき時には、

能く遊ぶといふ風で、總てに規律が立つて居るのである。されば、その子供らも、自分の親が斯く本分を重んじて、絶えず立ち働いて居る有様を見て、自然に其の感化を受け、何事にも規律を立て、無駄な時間を出さないやうに孜々として勤勉努力するやうになるのである。

十二 我が家庭に於る母の地位

我が國の夫婦と、歐洲諸國の夫婦との別について考へてみると、歐米諸國の夫婦は、多くは互に財産を持ち寄つて一緒になり、いはゞ共同生活或は共稼ぎとも云ひ得らるゝ風がある。例へば、男が一萬圓出せば女も一萬圓出し、二萬圓の財産として夫婦共同生活を営むといふやうなものも少なくない、是等の生活を其の子供らから見れば、恰も夫婦平等の権利のものである。

やうに思はれる。併し、我が國では、全然これと
其の趣を異にし、幼少な子供の眼から家庭に於
ける父と母との關係を見ると、母親が全權をも
つて家庭を支配して居るやうに思はれる所が
多い、現に自分等の家でも、子供等には自分より
も母親の方を慕つて、何事も母の命令を尊重し
て行く觀がある。是れ他なし、我が國に於ては、
男は殆んど家事に關せず主に外に出て働き、女
は常に家に居て、金錢の出納を務め、家事に關す
る内外の交渉、その他小供等は素より召使の事

に至るまで、萬事を處理して居る所が多いので、
自然幼少な小供等の眼には、母親の方が權利の
多いものゝやうに思はれるのも亦無理はない。
さすれば、我國の家庭に於ける母の地位は、歐米
諸國の事情とは其の態を異にし、子供等に對し
一層重大な權利と責任とを持つてゐるのであ
るといふ事を、わが婦人が總て能く知つて居な
ければ困るのである。

十三 新日本と母

母の問題は、國家の將來にとつて極めて重要な問題であると言はなければならぬ。曩に獨逸皇帝が大に良妻賢母論を主張し、又米國大統領ルーズベルト氏が、「男が額に汗することを厭ひ、女が母たるの苦を嫌ふやうになれば、國家は滅亡する」と言はれたのは、蓋し孰れも茲に鑑みるところがあつたのであらう。

日本國民は、男子も女子も、今最も深く國運の

發展について考へなければならぬ大切な時である。若し夫れ、日本の婦人にして將來其道を誤らんか、日本は到底歐洲諸國に比肩するとのでできないやうな、悲しむべき地位に陥るべき時機が到來しないと、いへないと思ふのである。

此機會に於て、乃木夫人のやうな、賢母の典型といふべき人の遺風を傳へるといふことは、頗る必要な事であると考へる。自分は、教育家でもなく、又婦人問題の研究者でもないが、世界の

大勢から観て、日本の國防上其將來を慮り、最も堅實なる次代國民教養の大任に當るべき賢母の切要なることを力説せんとするのである。

十四 我が邦婦人の覺悟

自分が豫て我が邦の婦人の事に關し、聊か考慮して居たことが、今日實際に現れて來た事實と、稍符合するところのあるのは、心中多少の欣

意なきを得ないところであるが、將來とも此の國と女との關係については、益研究を積んで行かなければならぬと思ふ。

最近佛國の某海軍大佐から、戦後に於ける國の復活に關して、親しく聽いたことがあるが、これは婦人に關係するところ多く、ことに之を引用することは頗る興味があることと思ふから、其の話を紹介しやう。

同海軍大佐の言はるゝに、——
「自分の國の六十パーセントは、農業に従事し

てゐるものである。随つて今度の大戰にも、戦線に立つた大部分は、農事に働いて居たものであつたといふことができやうと思ふ。さて、それらのものゝ留守中、其の田畑などは何うなつて居たかといふと、後に残つた婦女老幼は、何れも出征した男子に代つて田畑を耕し牛馬を驅使し、農作物の收穫に努力しつゝあつたのである。その結果、以前主として壯年男子が従事して居た時と少しも劣らない成績を收め、且つ其の收穫物が以前に比し

て、數倍高い價に賣捌けて居るのである、而して、其の費用に於ては、彼ら壯年男子の居た時には、或は酒場に這入りこむとか、或は遊蕩のために消費するとか、無駄に用ゐられるものが多かつたのであるが、それが婦女の手に移つてから、これらの冗費が除かれたので、其の得るところが多にかゝはらず、出づるところは頗る少かつたのである。而して、其の収入は、すべて皆郵便貯金のやうな方法で政府に預け、政府は之に對して通帳を發行し、そ

の貯金は之を軍費に使用して居たのである、此の預金者は皆眞面目な地方の婦女子のこゝとであるから、現金は無くとも、通帳の上段金高が増して来るのを見て、多大の興味と愉快とを感じ、之に促されて益々勞務に勵んだのであつた。

そこで、曩に戦線に行つて居た男らが戦ひのすんだ後に、田舎へ歸つて来てみると、田畑は自分らが居た時よりも能く手入れが行きとゞき、其の上自分らの曾てみたこともない

貯金の通帳が出来て居て、何れも相當な預金をして居るといふ有様で、彼れらは思ひがけなかつた悦びと共に、今更のやうに婦人の力の偉大なのに感激して、婦人と相協力して一層勞務に勵むやうになつた傾向がある。

元來社會主義とか、共產主義とかいふものは、言ひかへれば恒の産のないものが、腹癒せに多數をそののかして、富に傲つて居るものに反抗してやれといふやうな感情から由來して居ることも少くない。これまで其の日

暮らしをして居た農民らが、斯くの如くに
して恒産を得ることになつて來ると、社會主義
共產主義のものらと強ひて行動を共にし、世
間を騒がせやうとするものも、比較的少くな
つた譯であると思ふ。

都市に於ける婦人の活動について言はう
ならば、此の方面の婦人は、戦時男の留守中
は、専ら工業、商業及び其の他の事業に其の力
を注いで居た。而して、之も前段の農民と均
しく、總て男に代つて夫れぞれ業務上に裨益

し、相當な賃金を得て、多くは皆彼の貯金の通
帳を懐中にして居るものばかりであると言
ふことが出来る。これらの都市から出征し
た男子が凱旋して、親しく此の状況を見るに
及び、彼の農業に従事して居た男らの感じた
如く、婦人の力に感奮し、將來は大に相協力し
て共に働かうといふことになつたのである。
都市に於ける中流以下の婦人及び地方に
於いて農業に従事して居る婦人らは、戦争の
ために非常に自己の能率を向上せしめたと

共に、また大に覺醒を促されて、所謂世の中は
夫婦共稼ぎて行かなければならぬといふ事
を切に感じたのである。就中現時佛國の物
價は、平時の三倍に騰貴して居るのである、だ
から、其の爲めに男女一所に働いて行かなけ
れば、生活が甚だ困難であるといふことも一
面の理由であるが、又一面には、これら親しく
戦線に臨んで歸つて來たものは、戦勝を喜ぶ
半面には、將來復び敵を迎へなければならな
いといふ堅い覺悟を要する。所謂勝つて兜

の緒をしめよといふ觀念が、深くなつて來て
居る結果である、これらは、自分の生活と、國家
的觀念と相俟つて、共に將來非常なる積極的
活動をなすべきものと思ふ。
又佛國の中流階級について觀察するに、從
來佛國の中級には所謂小金を持つて居る俗
にしもたやと稱するものや、恩給て生活をし
て居るものが澤山あつて、彼れらのうちには、
その小金を貸すか又は他に之を利用して坐
食をして居るやうな人が多いのであるが、戦

後、物價の暴騰に伴ふ程度に収入が増さない
ので、一面には自分の生活費を節約し、他の一
面に於ては、身分相應に男も女も共に稼いで、
生活費の充實を圖つて居る状態である。此
の階級の婦人は、前段の女とは違ひ、特に戦後
の自覺に依つて働き出したものが多いやう
に考へる。

更に上流階級の状態について観るのに、蓋
しそれらの人々といへども、三倍といふ物價
の暴騰に對しては、之に伴はざる自己の収入

に顧みて、以前よりは不便な生活をしなければならぬやうになつて來たので、二臺の自動車は之を一臺にし、三頭の馬は之を二頭に
し、多數の使用人は之を少數に淘汰するとい
ふ風にして、各経費の節約といふことについ
て努力をして居るのである。

序に首都巴里について一言したきは、同市
にも、戦後の産物として、幾多の成金が出来た
のと、戦跡其の他を視察に世界の貴族富豪が
入り込んで來る爲め、頗る賑はつてゐるから、

或は多くの人々が、佛國は戦争前と少しも變ら
ないと言ふかも知れないけれども、之は所謂
皮相の觀て、佛國の全斑は地方の状態から精
細に打算しなければ其真相を判断すること
が出来ないのである。

以上述べ來つた様に、上流中流の人々は、積
極的又は消極的方法によつて、生活の安泰
と國狀の復活を計り、中流以下の男女は、共
積極的の勞務に依つて、其の安定と恢復を企
圖して居る次第であるから、現時の佛國は舉

て勤勞と節約との觀念に、緊張しきつて居る
と云ふても敢へて差支ないと思ふ。故に其
國勢恢復は、他に於て想像されて居るやうな、
それ程遠いものではあるまいと信ずる。

次に、國防について一言すれば、今次の大戦
に依つて、獨逸并に奧地利の海軍が全滅して
しまつた事であるから、將來佛國は海軍を極
端に縮少し、唯だ殖民地の保護、近海の警備を
以つて足れりとすべきて、若し一朝事が起つ
た場合には英國なり米國なり海軍力の強大

な國とも助け合ふ便宜もあること、思ふから、敢へて多くの海軍を備へて置く必要はないと考へる。之に反し陸軍は大に擴張して、更に國威の發揚、外敵の防備に力を盡さなければならぬと思ふ。

茲に於いて、自分は其筋へ、これから實業界に活動する事に意を決したから現職を辭したいといふ事を申出したのである。すると上官は、近いうち少將に昇進することでもあるから、今少し留まつて居るが可からうと言

つて止められた。これは上官としてまことに情に篤い、感謝にたへない挨拶であつたが、併し自分としては、此の上官の言葉に従ふのは、頗る心苦しいことであつた。何となれば、現時國家財政窮乏の折柄、かりにも昇進して、之に伴ふ俸給なり恩給なりを受けることになつたところ、佛國の將來に對する海軍の方針が前述の如きものとすれば、自分の貢獻すべきところのものは幾干もない、徒に名利に驅られ何ら奉公の義務を盡さず、より多く

の手當を受けるといふことは本意でないから、何うぞ自分の辭意を聽きとゞけてもらひたい、と言つたら上官は然らば許さうといふ事、今回豫備に編入せられることゝなつたのである。斯うして自分の希望は聽れられたから、將來は實業界に於て大に活躍し、更に一層國家の爲めに貢献したいと思ふのである。

この事、これは彼の佛國海軍大佐の話された大要であるが、上官に對して述べられた辭表に

關する理由は恰も乃木式であつて甚だ面白く感ずるが、就中佛國婦人が戦争の刺戟により大覺醒をなし、上下舉つて其の分に應じ國家のため活躍するといふことは、頗る美望にたへない。

又米國は我國と同じく、海を隔てゝの戦ひなるにも拘はらず、婦人の奉公觀念は頗る熾んで決して歐洲婦人の行動に譲らないと思ふ、即ち同國が戦争に参加した前後の状態及び戦争中に於ける活動例へば公債の募集、兵士の徵集、出

征者の後援、廢兵の慰問、遺族の救済及び其の他の宣傳に關し、婦人運動として、大に刮目すべきものがあつて、向後とても必要に應じ、適當な働きをするこゝと思ふ。更に翻つて敗者たる獨逸國の婦人を觀るに、彼等は久しき間國威の發揚に男子と協力して、漸く世界の強大國として、其の地歩を占むるに至つた折柄、一朝にして惨敗の淵に沈んだことであるから、之が復興に努力せんとする其の心念は、恐らく勝者に數倍することであらうと信ずる。

我邦の婦人も、此の例に鑑み、自己の境遇と責任とを顧み、光輝ある日本婦道に基き、世界の大勢に順應して、大に發奮するところなければならぬと思ふ。

國防といふことも、單だ、男ばかりではいかなので、やはり男と女と相俟つて、始めて眞の解決がてきるのである。

母性中心主義

參
考

下田東京女子高等師範學校教授

本書の校正方に終らんとするに當りて、我女子教育界の耆宿たる、東京女子高等師範學校教授文學博士下田次郎先生の『母性中心主義』と題する一論文を公にせらるゝに會へり。就いて精讀するに、是れ先生が時弊を濟はんがために、其の蘊蓄を傾注せられたるものにして、其の立論の根據均しからざるも、議論の中軸に於ては、上原大將の所説と軌を同じうせるものあり、婦人は勿論、苟も婦人問題を研究せんとするものゝ必讀すべき有益なる大文字なり。依つ

て編者は親しく先生を訪ひ、本書公刊の微衷を叙べ、
請ふに本書讀者の活參考たらしむべく、之を卷末に
併載することを以てしたるに、先生は直ちに編者の
希望を容れて之を快諾せられたり。編者は厚く先
生の芳意を感謝すると共に、本書の讀者に對して、此
の碩儒の論斷に深く學ぶところあるべきを説かん
とするものなり。(編者記)

すべて優れた仕事といふものは、決して容易
なものでなく、皆非常な努力の結果である。水
上を樂に進む水鳥さへも、足に運びは絶え間な
いのである。國が盛になるのも、國民が根氣能
く努力したからである。戦さに勝つといふの
も、戦さのみ勝つのではなく、平和の事業にも
勝つだけの強みを、國民が有するからである。
國が衰滅するのも、國民が白蟻となつて、内から
柱を喰つて行くから、僅かの風にも僵れるので、

昔から敵に亡ぼされた國は一國もなく、皆内から自滅の手續を念入りに講じた結果である。婦人の仕事は一向派手ではないが、國家の盛衰とは非常に關係がある。「ナポレオン」は他國と戰爭する前に、先づその國の婦人の様子を調べたといふ事である。さすがはその着眼も卓拔である。婦人が強固なる意志、鍛鍊された能力を有し、勤勉質素で、艱苦に堪へる國は、時の平戰を問はず、決して他に引けを取る國ではない。今後は正義と自由といふ事が、國際に行は

れて、戰爭も無くなる事を望むが、平和の事業にも競争は免れぬのであるから、國家の隆昌を圖るには、どうしても堅實にして、實力ある國民を養成せねばならぬ。それには第一、母たるものが、確りして、三つ子の魂から作り上げて行かねばならぬと思ふのである。

頃日芹澤登一氏が來訪せられ、上原將軍の我が國婦人の教育に關する意見を筆記せられたるものを示され、之を公にするについて、自分の執筆した「母性中心主義」といふ一文を、参考とし

て書中に加へる事を望まれた。將軍の軍事論ならば不思議はないが、女子教育論をされるのは、誰も意外に思ふ所であらうが、よく考へて見れば、將軍であればこそ、我が國婦人の教育に着眼されるので、深き敬意を表する次第である。讀む人はよく將軍の意のある所を體して、これが實行に努められんこと望むのである。芹澤氏は實業界の人で、繁忙な職務を有せらるゝに拘はらず我が國婦人の啓發といふ事に、年來盡力して居られる篤志の士である。氏が

この度この書を上梓して、全國の女學校その他に廣く配布されるのも、全く國を思ふ誠心の發動であるから、自分も喜んで拙文を提供した次第である。

大正十年九月十日

文學博士 下田次郎 誌

母性中心主義

文學博士 下田次郎

地球上に始めて生物の現はれたのは、少くも數千萬年の昔の事と考へられる。この數千萬年の間、自然は少しの休みなく向上の一路を邁つて、謂はば非常なる根氣と努力を以て原始的の單細胞の生物から、遂に人間を創造するまでに漕ぎつけたのである。更に溯つて無機物から、單細胞にせよ、有機の生物が造り

出されるまでの自然の忍耐強き準備を考へて見ると。先づ火の玉の太陽から地球が飛び出し、太陽の周囲を地球の年齢ほど廻轉して居る中に、表面が冷却して、水と陸が分かれ、空気が包まれて、生物の出現すべき條件が整へられたので、地球の成立の抑々から絶えず生物を出現せしむべき方向に地球は進行して居たとはいへるのである。その時間は最初の生物が地球上に現はれて、人類に迄進化するに要せる時間よりは遙に長いものであつたに違ひない。して見れば、生物を出現せしめようといふ事は地球成立以來の謂はば目論見て、否地球の母體たる太陽に、地球が宿つて居た時からの目論見てある。故に一たび地球上に

生物の出現せることは、それまでの自然の努力が報いられた譯で、自然にとつては生物は虎の子のやうに、大切に大切にならぬものである。そこで生物には皆自己を保存しようとの強い努力、即ち強烈なる生存の慾なり傾向なりが具はつて居る。而して下等の生物よりも高等の生物を造り出すには、一層自然の手がかゝり、物入りが多かつたから、高等の生物ほど、自然から見れば大切な寶である。従つて生物は高等になるほど生存慾が強く人類に至つて、最もそれが強くなつたものと考へるのは論理の許す所であると思ふ。即ち人は意識的にどうかして死ぬまいと願ひ、そのあらゆる方法を講じ、生理學上到底死なねばなら

ぬ事が分ると、死んでも命があるやうにと、宗教といふものを作つて、死後の生活といふ事まで信する者があるやうになつたのである。即ち宗教は人間の生存慾の嵩じた結果である。他の動物には宗教はない。それほど生物は、殊に人間は自己の保存に努めるものである。といふのもその背後に自然があるのて、生存は個體の願ひでなく、實は自然の願ひである。而して自然は生物個體を生存せしむべく、飢餓又はそれに相當する衝動を生物に與へ、又それを充たすべく食物を與へた。

しかし生物個體はどうせ死滅せねばならぬから、その代り自然は個體に子孫を造らして、その種を繼續せしむるをする。

その手段の一つとして、雌雄又は男女兩性の間に愛なるものを生せしめて、これに由つて兩性を相牽引、合資せしめて女性に子を生ます工夫をした。即ち自然から見れば兩性の個體は後繼者を造らしむる方便物で、子さへ造つて獨立できるまでに仕ておいてくれれば親には用はないのである。それで生殖能力がなくなれば、情け容赦もなく、老年を以て、死を以て自然は之に報いる。しかも生存の否定は、兎に角自然に不賛成であるから、個體の最後にも死の苦痛を以てその意を表するのである。

愛は兩性を合資せしむる爲めの磁石で、種の繼續といふ自然の目的を實行する前褒美として、自然が兩性に與へたものであ

る。愛は自然から見れば、種の繼續の方便であるが、兩性の個體から見れば、目的そのものとなつて、子を造らぬ前に愛の犠牲となつて果てるものすらあるのは、自然の藥が利きすぎたので、自然はその筈ではなかつたのである。

これを要するに、生物個體の生存と種の繼續とは、自然の二大努力の目的である。この目的の爲に自然は生物に飢餓と戀愛とを與へ、個體に營養物を取らしめ、生殖を行はしむることとした、即ちシルレルの言ふやうに、飢餓と戀愛とは生物を根本的に支配する動因である。(植物に於ては飢餓とか戀愛とかいふ意識的の慾はないが營養物を取り、雌蕊と雄蕊の生殖子の融合が

ある。)而して個體の保存に必要な食物を取るといふ一事に於ては、兩性に於て大した違ひはなく、大概同じやうなものであるが、生殖に關しては、兩性に分業があるのみならず、その女性の關與する部分は男性のそれよりも遙かに大なるのである。今左にその事を少しく述べて見よう。

—

生殖の方法は、これを大別して無性生殖と有性生殖とに分ける。

一 無性生殖とは雌雄二個體の生殖細胞の融合を要しない

て、一個體が分裂し或は胞子を生子、或は發芽して子孫が出来るのである。下等の生物はこの方法に由つて生殖する。例へばアミーバは一個體が分裂して二個體となり、又それが分裂して四つの個體となるといふやうに繁殖する。分裂と同時に親は無くなり、出來た二個體は親が半分になつたので、親でもあり子でもある。胞子に由る生殖は親の體内から胞子を生出して、それが個體となるので、これには親が残り、そして子が出るのである。しかしその親は唯一つであつて、男性とも女性ともいふ事はできない、唯親といふ外はない。隱花植物や胞子蟲は、この生殖法に由つて子孫がてきる。由來生殖といふのは、親から芽

が出てそれが子になるのである。芋の蔓が又一つの個體となり、サナダムシの部分が獨立の個體となるが如きこれである。これらも親は男性とも女性ともいふ事はできないし、子にも性はないのである。即ち自然は初めには無性生殖のみに由つて生物の種を繼續せしめたものである。

二 有性生殖、これは雌雄二個體の有する生殖細胞が合體し、その成分を融合して、それから子が出るのである。従つて個體は雄か雌であつて、生殖機關その他に於て形を異にして居る。無性生殖からこの有性生殖に進む中繼の生殖法に、接合生殖といふのがある。これには外見上同じやうな單細胞の二個體が

接合して、双方の内容を一部分他に渡して内容に新成分を入れ
又離れて分裂生殖を爲し始めるものがある。かゝる二個體は
見た所は同じやうで、實際どちらが雌とも雄ともいへないが、兎
に角生殖するのに、或二個體の接合を要するのである。これが
無性生殖から有性生殖に移る中繼ぎである。有性生殖にも雌
雄同體、處女性殖、雌雄の世代交替等種々の形式があるが、この細
かしい事は略する事とし、その標準的なものは雌雄異體の生殖
である。これは雌と雄の個體が別々にあつて、その接合によつ
て生殖するので、高等の動物は皆この方法によつて子孫が出来
る。人類でいへば男と女とが生殖に必要である。

人類に縁の遠い無性生殖の事はしばらくおき、有性生殖に於
て、兩性の生殖に與る分け前はどちらが多いかといへば、いふま
でもなく女性の方が遙に大である。レスタ、ウオードをして
言はしむれば、男性は唯女性に受精せしむる爲に、謂はば自然が
後から思ひ付いて作つたものである。男性の用は血統を交叉
して、種に變化を與へ、複雑なる素質を有する個體を生せしむる
事にある。従つて男性は女性に受精せしむれば、その使命は果
たされたのである。それで下等の動物には、その用がすめば、男
性はすぐと死ぬるものがある。かかる男性は唯受精せしめん
が爲に生れたのである。高等動物では男性がすぐと死ぬる程

てはないが、しかしやはり一時死を防げしむるほどの可なり
の消費である。受精に於て男性の使命は果されたが、女性には
受精後に大役が課せられる。即ち妊娠、出産、哺乳これである。
男性にはそれに相當する生理的の賦役はない。植物でも花粉
が散つて雌蕊に附けば、雄蕊は萎れてしまふが、雌蕊はこれから
勢を得て成長して、實となり、その實から子が出来る。即ち雄の
命ははかないもので、雄の死せる後雌は榮えるのである。それ
は受精後子を生むといふ役を果たさなければならぬからであ
る。高等動物に於ては、雄の運命は下等動物のそれの如く、はか
なくはないが、職能上からいへば同じものである。雄は生殖に

費す身體の精力が、女子ほどに大でないから、精力の大部分を自
己一代の活動に費し、花火の如く派手に散つてしまふ。雌はこ
れに反して、身體の精力を子を造るために蓄へ、使はねばならぬ
から自己の活動の爲に餘り消費しない。従つてその生活は地
味で、活潑でない。即ち男性はカタボリズム（異化、消費、破壊の
主義）を代表し、女性はアナボリズム（同化、蓄積、構成の主義）
を代表すると云ふことが出来る。

斯様に説き來つた所から見ると、女性の天職は子を生むとい
ふ事即ち母になる事にあるので、「生めよ、繁殖よ」とは自然が
女性に下した無上命令である。即ち子を生まない女性、母にな

らない女性ぢよせいは、自然しぜんの期待きたいに背そむくので、自然しぜんに言いはしむれば、それなら造つくるのではなかつたのである。自然しぜんは生なま々の原理げんりであつて、萬物ばんぶつを生なまずる永遠えいゑんに若わかき「母はは」とも見みるべきである。而しかして生殖せいじくに與あつる部分ぶぶんは女性ぢよせいの方が男性だんせいよりも遙はるかに大だいであるから、換言くわんげんすれば女性ぢよせいは種しゆの繼續けいぞくといふ自然しぜんの努力どりよくに賛同さんどうし、貢獻けんけんすることが大だいであるから、自然しぜんは男性だんせいよりも女性ぢよせいを大だい切せつにし、生理せいり的に生活せいかつの便宜べんぎを多く與あつへて居ゐる。即すなはち女性ぢよせいは生活せいかつにの適應てきおう性が大だいである。男をとこの兒こより女をんなの兒こがよく育そだち、空氣くうき、食物じよく、睡眠すいみん等の不足ふそく、缺乏けつぼうにもよく堪たえ、且かつ概がいして病氣びやうきや創傷そうじゆうもよく癒いえ、又また長壽じゆである。要えうするに女性ぢよせいは自然しぜんの寵兒ちゆうじである。それといふの

も子こを生うます爲ためであり、又またその褒美ほうびでもある。

三

以上いじやうは有性ゆうせいの生物界せいぶつがい一般いぱんの事ことであるが、人類じんるいに於おいても同じ事ことであつて、婦人ふじんはやはりこの自然しぜんの寵兒ちゆうじたる特典とくでんを有あして居ゐるのである。男をとこの生活せいかつは生理せいり的には波瀾はらんなく、平坦へいたんなる道みちを行ゆくが如ごときものであるが、婦人ふじんには血潮ちゆうせうの満干まんかんがあつて、四週目ししゅうめに一廻くわいの高潮かうせうがあり、可かなり量の血液けつえきを失うふ。ゼルハイムに依よれば、婦人ふじんがその爲ために一生しやうせい涯がいに失うふ血液けつえきの量りやうは、自己じこの體量たいりやうの二倍にばいである。而しかしてこの毎月まいげつの出來事できごとは、毎月まいげつの波動はたう的生活せいかつの波頭はとう

であつて、その前後にも生理的波瀾はあるのである。従つて婦人の自然の生活は、海上の波を乗り切るやうなもので、男子の生理的生活の坦々たるものとは違つて居る。而してこの月經のある間は生産能力があるので、それが閉止すれば子は生めない。即ち子を生む身體でなくては、月經はないので、月經のある意義は子を生むといふ事の外にはないのである。

身體が成長してしまふと生殖作用が始まる。即ちこれまで成長に要せる物資を、生殖の方に廻はすのであつて、生殖は體外への成長といへるのである。従つて女子に生殖作用のある間は、やはり成長して居るやうなものである。成長して居る間は

若いのであるから、女子は生殖能力の存する間は、若さを保存して居るのである。この若さは子を生むためであつて、男子が若い女子を愛するのは、子を生ます爲である。生殖能力を失へば、若さと女らしさを併せ失ふやうになり、女が中性的になる。要するに、女の若さは子を生むものとして意味があるのである。妊娠中は心臓、肺臓、腎臓、肝臓は凡そその活動を倍する。それは自體と胎兒の二人分を養ふためである。男子にはこれに相當する生理的奮發はなく、男の體制では、腹に兒を宿すことは思ひも寄らぬことである。而していよく出産すると、體内に大負傷をなし、多量の出血をなすに係らず、三週間もすれば元に戻

り合して並みの身體となり、産が順當であれば、却つて消失よりも補償が多くて、一層健康になる。女子の身體は不思議に弾力のある身體である。男子の身體にはこれだけの弾力はない。女子の身體は子を生ます爲めに出来たのである。子が生まれると、哺乳が始まる。「生身には餌食あり、乳房といふ天道のお扶持力」(近松)。胸臆の中に於て甘露の泉を出して、子は生育する。女子が何の爲に乳房を有し、乳が出るやうに出来て居るかといへば、子を養ふ爲の外に意味はないのである。

以上述べた所を総合すれば、女子の身體は子を生む爲めの身體としてより外には、解釋できないのである。女子は女子なる

が故に、子を生んで母とならねばならないのである。

一體身體の機關といふものは、皆それぞれ生活上の意義があり、用があるから存在するので、これを適度に働かすといふ事は、心身の利益である。無用のものなら、始めから自然がこれを造らない。又使はずに居れば、男の乳房の如く退化する。退化せず、立派に生理上意義のある機關は、その機能を行はしめねば、自然の造つた主旨に悖るので、心身に不利益である。生殖機關は地質時代の生物に用があつて、今日は不用の退化機關では無いのみならず、子を造る大切の機關で、身體のあらゆる機關中ても、自然が重きをおいて居るものであるから、生理に叶ふ正常な

る生活を営むには、生殖作用を適度に行はしむることが必要である。即ち女子としては結婚して子を産むといふ事である。適度の生殖作用は、其機關の機能を活潑にし、心身に満足と好影響とを與へ、生殖腺の内分泌の作用も十分に行はれて、女子をして、心身共に最も女らしくするものである。健康の女ならば出産は一般に身體に有利であり、哺乳育児は女性を眞に女性たらしむる所以である。これに反して、獨身生活は自然の贅せざる所であつて、その心身に於ける影響は徹底的である。それは自然が勘定を取るからである。愛の強烈なる、總身を根こそぎに揺る要求が満されぬといふ事が、如何に心身に不本意なる影響

を與へるかは想像するまでもない、事實が澤山これを證する。「古來尼さんにはヒステリーの者が多い。殊に有名なるセント何々と言はれるやうな尼さんの多數は、高度のヒステリーであつた」と、エリスは言つて居る。獨身の婦人にはヒステリーか、それに近い人が多い。又神經衰弱や、感傷的で、喜怒哀樂の變化の劇しい人が多い。それには生活上の壓迫や苦勞、心細さも手傳ふ事もあるが、生殖作用が適度に行はれないといふ事が與つて大に力がある。生殖作用が適度に行はれねば、生殖機關は萎縮し、その心身に及ぼすべき影響を不完全ならしめるからである。如何に金があつて物質的には足り足つた暮らしをして

居ても、獨身婦人には何となく物足りなさがあつて、つまらなさ
相て、九尺二間の裏長屋のお内儀さんにも見るやうな、一種満足
の相を見る事が出来ない。即ち女子は原則としては、どうして
も結婚して母となる道行を踏み、又母とならねばならぬのであ
る。

四

以上は主として生理的方面から、女子の母たるべき事を説い
たのであるが、これから心理的方面から、自然は女子に何を要求
するかを見よう。

「雄子の羽の錦も鶴の毛ごろも子を思ふをりの色はかは
らす」とか「山は焼けても山鳥や立たぬ子ほどかはゆいもの
はない」とかいふ通り、母の子を愛する情には人も禽獸も變り
はない。其母の愛は下等の生物の雌から、長い進化の過程を經
て發展したものである。植物に於ても、無花植物から有花植物
に進むと、最初の母性が現れる。即ち種子は外皮を以てよくこ
れを保護し、後日の爲めの食物、即ち果肉を備へておくのである。
動物では、昆蟲の如き、雌は食物になりさうな葉に、又兩や敵から
保護する爲に、葉の裏に、或は葉を捲いて、ホームを作り、そこに卵
を生みつけておく。こゝに卵に對する母の配慮があつて、母親

的本能の曙光を見るのである。しかし卵が孵化する頃には、母はもはや死んで居るので、子は皆孤兒である。毛蟲や蠶の如きこれである。蜘蛛の母は絲で卵を包み、身體につけて保護して居る。もし卵囊を捨ててもすれば、大騒ぎをして取り戻さうとする。中には卵が孵化した後も、或時の間脊の上に乗せて居るものもある。蟻や蜂は巢を造つて卵を保護して養ふ。魚類は多数の卵を生みつけおいて、多くは母が保護せぬから、僥倖なものだけが孵へるのであるが、それでも適當な場所を選んで産卵する。鮭は川の上流を選び、鱧は海に下つて産卵する。中には子に危険が迫ると、口中に入れ、或は脊にのせて泳ぎ、又は連れて泳

ぐものがある。兩棲類では、蛙は膠様の紐形又は圓形のものの中に卵を包んで居る。又池の泥に穴を掘つて、そこに産卵するものもある。南米のビバといふ蟻の雌は、脊が蓮の實のやうになつて居て、その中に雄が卵を押込んでやり、孵化するまで脊負つて居る。蛇は木の根の下か、砂の中に産卵し、或る大蛇は卵の廻りにとぐろを捲いて、孵化するまで食べずに番をして居る。龜は砂の中に卵を産卵して、砂をかけておく。鱈は砂に深い穴を掘つて卵をおき、孵るまで母がその上に眠る。或人は母鱈の不在中、周圍に丈夫な垣をしたところ、垣の下に穴を掘つて卵を他所に持つて行つた事を報じて居る。

これらの動物に於ては、父が母を助け、或は巢を保護する事もあるが、多くは母が卵の保護世話をするので、親としての本能は常に母の方が強く、母の配慮から智慧が進むのである。鳥類になると、母が巢に卵を生んで、自分の體温で暖めてこれを孵へす。巢には羽毛を入れ、又はもやしのやうになつた木の葉などを入れて、暖くするものもある。歐洲の北海に居る鴨に似た鳥は、母が胸毛を抜いて巢に入れる。それを蒲團に入れる爲に高く賣れるので、漁夫が取ると、母が又羽毛を抜いて入れ、後には胸が赤裸になる事があるといふ。「母鶏は二十一日間卵を抱いて居るが、その間に平均に温るやうに卵を上下左右に廻はして居る。

そして初の十八日の間は毎日一度づゝ餌を求めに出るが、孵る前三日間は全くの断食である。雛の出た後は羽翼の下に抱いて寝るので全く中腰である。どれ程苦しいか一晩やつて見れば分る」と或本に出て居る。鳩は母鳥の餌囊の内面の皮膚がどろどろに溶けたのを、口から吐き出して雛に與へる。これを鳩の乳といふ。鶉は母の胃の中に雛が嘴を入れて、半ば消化した魚を食べさす。鶏は餌を捜して、雛を呼んで食べさす。そして大きくて口に合ぬものは小さくして與へる。又燕のやうに空中で昆蟲を捕へて、何回となく巢に運ぶものもある。千鳥は敵が襲来すると、母鳥が跛になつた真似をして、敵の注意を自分に

よせて、雛を逃すこともある。これは危険に際しての母の勇氣と智慧の一例である。極地の氷上に棲むペンギン鳥は、産居生活をするが、母鳥が卵を孵へす時は、どんな事があつても巢を離れない。しかし寒くて孵化がむづかしいから、親鳥で卵の雛を有つて居らぬのがある。さうするとなほ子が欲しくなると見えて、他の親から養子をしようとする。それで多数の母鳥が来て、一つの卵又は雛を取巻いて、それを奪ひ去らうとする。さうはさせぬと、外の母鳥が争ふ。すると夫まで妻に加勢して取らせようとして、あの不細工な風をしてもみ合ふといふ。なほ鳥類には色々面白い例があるが、要するに、下等の動物よりは一層

母心が發達して、中には感動すべきものがある。父はやはり一般に子には冷淡で、母が重に子の世話をするのである。

哺乳動物に至つて、哺乳といふ事を以てその名稱とする程で、その部門の動物は、皆母の胎内で育ち、生れると母の乳で養はれる。卵生動物は字の如く卵を産むので、母と卵とは形が全く違つて居るが、哺乳動物は親の形に似たところで、胎内から出る。これは母が我子と認めるのに都合がよい。哺乳動物では、卵生動物よりも哺乳といふ負擔が母に加はるので、一層母は骨が折れる。且意識的に母子が相認めるから、相互の愛着も下等の動物よりは強い。人間では人工營養でも子を育てるが、他の哺乳

動物は母の乳が出なければ子は育たない。それほど哺乳は貴いものである。人の母も他の哺乳動物を見做つて、自分の乳で子を育てるのが一番宜いのである。哺乳動物の母親は下等の動物から母親としての修業を、進化上積み来たものであるから、母親の子に對する心盡し、打込み方は一層強い。獸類の母は子が獨立するまでは子を養ひ可愛がる。それで敵や人を見ると直ぐに逃げる獸でも子を連れて居るときは、刃向つて来るものがある。人の飼つて居る白鼠や犬猫でも、乳を吞せる子のあるときは、母の氣が荒く、人にも咬みつき、子でもとらうとすると非常に怒る。野獸でも危険なのは、子をもつた牝である。人の

母でもその通りで、同じ年頃でも處女と母とは餘程母が強い。ユーゴーは若い母親を牝虎に比し、「女は弱し、されど母は強し」といつて居る。子が側に居るときは、母親は何となくうれしいので、満足してある。鯨は子を愛する情の濃かなもので、特に座頭鯨の如きは、子が半殺しにても遇ふと、父は逃げるが、母は子を助けようとして、子をかばひ、遂に一所に殺されることがある。一度逃げてても子を氣遣つて、必ず又歸つて来る。それで子をつれた鯨は、子を殺せば屹度親が捕れるといふ。猿でも子を失つた母は、非常に悲しんで、終に病氣になつて死ぬことがよくある。又子をとられた母猿が、樹に縛られて居る子を見て、自分の頬を

打つて憐みを乞ふたが、殺されたので、母猿が悲んで自ら擲ちて死んだといふ話もある。大水で夜中に子犬が箱ごめ流れさうなのを、母犬が家の戸を足てがりがいにして、家人を起し、助けを呼んだのもある。それと似た話は、先年東京地方に海嘯があつた時、葛西村字中割の梅原お寅（當時三九）といふは、家が波に倒された時、一兒を荒縄で背負ひ、他の二兒を兩腋に抱へて、濁浪の爲に北へ北へに流されて行つたが、中途で力が盡きて、右手の子を波に浚はれんとしたので、その子の結髪を口で咬へ、手で流れくる材木などを排しつゝ、千葉方面の海岸に打上げられた。口に咬へた子は命を取り留めたが、脊の子は死んで居た。お寅

は子を背負つて居た所の外、全身に傷を受け、子を咬へた齒は全部緩んで、咀嚼に堪へぬやうになつたといふ事が、當時或雜誌に出で居た。母親となると、獸類でも人間でもこんなものである。獸類の父は子には案外冷淡で、母が哺乳さして、子を守つて居る時でも、呑氣に出歩いて、一向顧みもしないものがある（人の父にもあるが）。猫屬の如きは、母が子を愛して、父に疎いため、母の注意を父に向けさす爲に、父が子を殺すこともあるので、母は子を隠すことがよくある。哺乳動物では、雌は妊娠、哺乳等の重荷を背負ふから、雌は雄に従へられ、雄は暴君、雌は奴隸となり、又一夫多妻となる傾がある。それだけ雌には犠牲心が強くなり、

子の爲に配慮し、勞苦することを却つて無上の特權とし、喜びとするに至ることもある。

五

人間の母に至つては下等動物に於ける母親の幼稚園から、漸次進級して、母親の大學に入つたやうなものである。即ち人の母はあらゆる動物の母の絶頂であり冠である。他の動物の母は、人の母を地上に出現せしむべき階段である。如何に人の母が、妊娠、哺乳、育児を通して、子の爲に盡すかは云ふも恐かなほどである。自分はこの事が拙著「胎教」及び「母と子」に於て、

種々の實例を擧げ、又これを文學に求めて稍々詳しく述べた。その事だけを書いて二冊の書物になつたほどであるから、とてもこゝに之れを盡くすことはできない。人の子は未成熟期が長く、獨立するまでには二十餘年もかゝるので、それまでには動物は多くは老年となり、又は夙くに死んで居る。それだけに人の母の配慮苦勞も大で、とても他の動物の母の比ではない。特に幼時は殆んど母の手一つで育つので、一二歳の子は勿論、小学校に行くやうになつても、何かにつけて、「お母様」と二言目には呼んで居る。女には子供の時から母性が潜んで居るので、女の兒は幼兒をいたはり可愛がり、人形にまでもかしづく。さ

うして生殖可能の年頃になると、異性を憧憬すると共に子をほしがらるやうになる。自然からいへば男は子を産ます方便で、目的は子であるから、子のない中は女は第一に夫を愛するが子が出来ると、子を第一に愛し、夫は第二次的、附加的のものとなることがよくある。それほど、婦人には子が氣に入るもので、子ほどの合性はないのである。「はらみ喜びて我腹の中に跳れり」とある如く、妊娠の喜びは、始めて母となる者の比較を絶つた喜びであつて、創造者のみの感じ得る喜びであり、大自然の喜びであり、天地と共に喜ぶのである。それから出産となれば、「一人の嬰兒われらのために生れたり」て、その高き産聲は自然の揚

げたる凱歌である。生れた子に初めて面と向つた時の歡喜に恍惚たる母の有様は、天上の光景ともいふべきもので、宗教畫の最も高尚なる書題の一つとして、古來取り扱はれて來たほどである。哺乳もまた母の心を樂ましむるもので、星のやうな瞳で母を見上げつつ、小さい手で乳房をいぢられながら、柔い紅の唇で、乳を吸はれる感じは、哺乳する母ならては經驗するを得ざる悦樂である。しかし又一方では、妊娠中の不便、出産の苦痛、哺乳育児の苦勞もあるが、母はそれしきの事に屈託するものではない。子が世話をやかせば、やかすほど、子の犠牲となればなるほど、子に對する愛情は燃え盛り、眞の歸人はその間に作り上げられる

ので、母となつて、婦人は卒業するのである。

以上述べ來つた所によれば、女子は生理的のみならず、心理的にも母となるべきものであつて、これが女子の採るべき最も正常な自然の道であることが理解されるであらう。「そらの鳥を見よ、彼等は雛を養ふにあらずや。野の獸を見よ。かれらは子を生むにあらずや。水中の魚を見よ。かれらも亦然らずや」とは、子なき婦人の嘆聲ではないか。「慶たし惠まるゝ者よ。爾は女の中にて福なるものなり」とは、子をもてる婦人を祝福する言葉である。

婦人は子があるので、張り合ひが付き、苦勞をも苦勞とせず、勇

んで働くことができ。子は女の合樂で、生けるラヂウムである。持藥にもつてこれほど利くものはない。動物でも子は母に智慧を興へ、母を賢くするものであるが、人に於ては一層さうであつて、母は子を育てる必要に迫られて、種種の工夫を凝らし、思慮を廻らすことになる。これほど生きた教育はないので、子供は母の大先生といつてもよい。幼兒は母を快活にし、若かへらし、健康にし、新鮮にし、オリヂナルにする。それで教育を受け、ない婦人でも、母となつた人は、どこかに練れたところがあつて、高等の學校教育にも代へられないものを、經驗上もつて居る。従つて彼女は母たりとの一言を聞けば、その婦人には、或程度の

値打をつけてよいのである。「彼女は嘗て美人であつたといふ事の外何もない婦人は氣の毒なものである。」ゲーテは「久遠の女性が我等を向上せしむ」と言つた。その女性は母として全盛に花咲くのである。女子は子供の時より潜める母である。女子はこの潜める母性を發揮して、母の榮光に居るを欲しないのであるか。

六

こんな事を言はないでも、生存慾と並んで生殖慾は最も強いものであつて、子が欲しいのは、ペンギンの情であると共に人間

の情であるから、婦人も結婚して、成るなといつても母になるに違ひないといふ人もあるかも知れぬが、實際は必ずしもさうでなく、婦人て獨身の人があり、増す分でも減らないやうである。婦人が獨身であるのは、凡そ次の理由から來るものと考へられる。

一 主義から來た獨身 主義にも色々あるが、純潔といふ考から來るのも、その一つである。人は純潔の生活をするのが理想で、異性に接しては汚れるから、生涯童貞であるべきであるとして、尼さんなどになる。キリスト教の舊教の僧侶の如き、これである。それならば人間が皆この理想の生活を實行したならば、

人間が絶えはせぬかと反問すると、イヤその時は神様が性交しないでも、子の出来る方法を授けて下さると澄まして居る人もある。それでは人間がまた下等の生物のやうに、無性生殖をする事になるので逆行である。西洋では中世に偉い人が僧侶になつて獨身生活をし、子孫を残さなかつたのは、優秀の血統を絶やしたので、人類の損失であつたといつて居る人もある。女の聖者といはれるやうな人も偉かつたに違ひないが、獨身で子孫を残さなかつたのはをしい事である。又哲學上の厭世主義から、人生は考へ能ふ最悪の生活だから、生を否定して、人類を滅亡せしむるが、理想であるといふので、獨身を主張し、實行するのも

ある。これは哲學者だけに女よりは男に多い。優生學からいへば、それらの優良なる人の種こそ繼續したいのに、残念な事である。

二 活動の都合から来る獨身 自分が事業をするには、配偶者や子があつては面倒で、それに精力を奪はれるから、一人暮らしをするのである。男子では學者や志士によくそんなのがあり、軍人や實業家にもある。婦人でも學問で立つ人、教育、博愛、矯風などの事に身を捧げる人には、よくそれがある。しかし(一)の主義や哲學から獨身で居る人は、女には少く、西洋の女よりは日本の女には尙少いが、(二)の方はそろゝ日本にもありだした。

外國語の出来る人で、ミス何某と呼ばれ、西洋に行つた事があるか、西洋婦人と交際の多い婦人などによくある。尤も今の若い婦人には主義とか活動とかの名にあらがれて一寸えらさうに聞こえ、新らしげに見えるので、獨身で暮らすなどと云つて居る者もあるが、多くは永續させず、いつの間にか丸鬚などに結つて居るのははめてたい事だ。

三 生活の都合から来る獨身 自分が一人子であるとか、兄弟は多くても皆女で、自分が長女であるとか、末の小さい子が一人男であるとかして、自分が親始め一家を扶養していかねばならぬといふやうな婦人がよく獨身生活をする。これは多くは已

むを得ずの獨身で、感心ではあるが氣の毒な人である。親も氣の毒がり、本人も時々悲觀することもある。かういふ婦人は元來獨身主義の人でないから、親が亡くなつたり、弟妹の始末がつくと、晩婚する人もある。又可なりの俸給を貰つて、自由な生活をして居る婦人が、結婚するとその自由を奪はれ、俸給まで棒に振るのはをしいといふので、躊躇して居る内に婚期を失して自己を獨身婦人といつの間にか見出すものもある。又美貌を鼻にかけて、夫の選り好みをして居る中に、皺が寄つて仕まふのも、稀にはあるだらう。しかしこんなのは、選られに來る男子が多すぎて、取殘される氣遣ひはまづはない。美貌の代りに財産を以

てする場合も亦同じい。

四 己むを得ずの獨身 別に主義も理想も哲學もない、結婚
したい一方でありながら、遂に獨身といふ婦人である。財産が
無いか少いかで貰ひ手のないのもそれ、これは西洋に多い。
生活難がはげしいからである。日本では随分手ぶらても嫁け
る。その代り離婚も多い。器量が優れない爲に、残されること
もあるが、女にすたりなして、これは極めて稀である。この外
生れつき結婚出来ない身體をもつた婦人もある。又女子の過
剩な國では獨身婦人が多い。殊に西洋では此度の歐洲大戦で
壯丁が澤山死んだから、益々婦人が餘り、先づ結婚できぬものと

思つて居なければならぬほどである。それでも醫術が進んで
居るから、随分ひどい畸形や片輪になつても、生き残つた癡兵が
あるので、かゝる人に看護旁結婚する有志の婦人もある。かう
いふのには感心の人もある。歐洲に獨身婦人の多いのは、主と
してこの婦人過剰か生活難の爲である。結婚したいのは山々
であるが、その爲に出来ない誠心氣の毒な人々である。我國で
は結婚しようと思へば大概できるの、又殆んど結婚して居る
のは、實にめてたい事で、これが最終の日本の強みといつても可
からう。といふのは獨身婦人は兎角ヒステリックになるので、
ヒステリックの婦人は實に始末にいけない。一家に斯る婦人

か居ると家庭の平和を亂し、一家をこはす。それには一人て澤山二人までは入らない。社會に斯る婦人の多いことは、社會を神經衰弱に陥れ、病的にし、これを破壊する。それ故家を破り、國を亡ぼすには、斯る婦人を殖やすに限る。歐米は目下その手續を入念に履んで居るので、どんなに國が富んでも、一國の根本資源の婦人がかうなつて來ては、心細いものである。日本は心丈夫に思ふがいゝ。何も太平洋會議などにビクビクすることはない。西洋はこんな所で強がつて居ても、案外の所から内から弱つて來る。こゝをしつかり握つて、女は殆んど皆結婚して生理的又心理的に最も自然な満足な生活を、婦人に營ませすがよい。

これが國是の第一である。それには我が國の家庭の改善が必ず要である。今日のやうな義理と人情の矛盾の多い家庭を改善して、義理と人情が調和するものとしなければならぬが、これは話が別になるから略する。

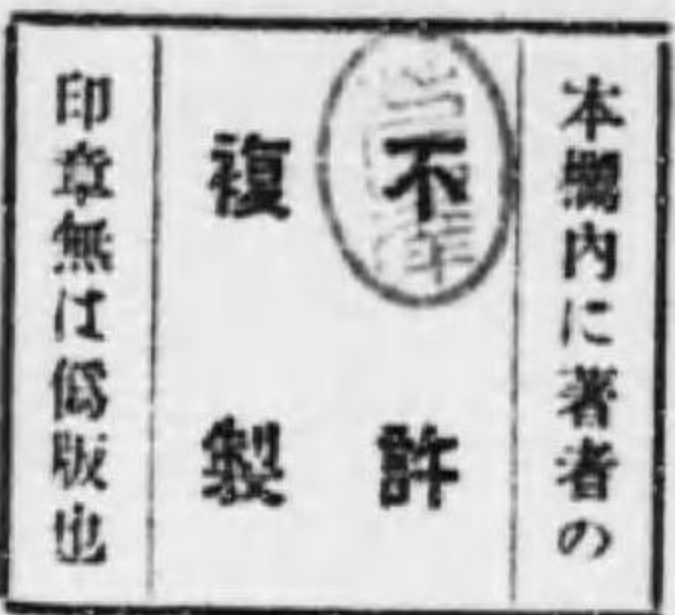
五 變態から來る獨身 性的に無感覺で、異性の意味の分らぬ婦人、男子の嫌ひな婦人、子供の嫌ひな婦人、かゝる婦人は獨身で通すことがある。變態だから仕方がない。それを普通の若い婦人が新らしがつて、真似しようとする者のあるのは、心得違ひである。變態心理の所有者たる病的の作家が書いたものなどを讀んで、これに私淑し、實感にもないのにあるらしく、自分は

男が嫌ひだとか、子供がいやだとか、雑誌などに吹聴して、得意がる女文士らしい者が時々あるのは、苦々しい事だ。もし本統にさうならば、それは變態の人で、正常の婦人ではないのだから、隠れて居る方がいい。何も自分のアブノーマルな事を吹聴するには及ばない。並みの女ならば、男子が好きで、子供が好きで、早く結婚して子をもりたいものなのである。又變態には中性的婦人といふのもある。男か女かよく分らず、音聲舉動なども女といふよりは男に近い方である。可なり濃い髭などを生やしてゐる、男のやうな顔をして居る。これも例外だから論なし。先づ婦人が獨身である理由は、大體上に列擧したやうなもの

てあらう。その大多數は氣の毒な方で、決して常人の本意ではない。中には崇高な動機から獨身の婦人もあり、人類の恩人といはれるやうな人もあるが、それは萬に一つもない例外で、一般婦人の手本とすることはできない。かゝる感動すべき、又感謝すべき獨身の婦人でも、生理の法則は見逃してはくれないので、やはり獨身生活の及ぼす心身の不利益は受けて居るのである。人事には例外はあるが、天則に例外はない。要するに婦人は年頃に結婚し、母とならねばならぬのである。

大正十年十月卅一日印刷
大正十年十一月三日發行

定價金壹圓五拾錢



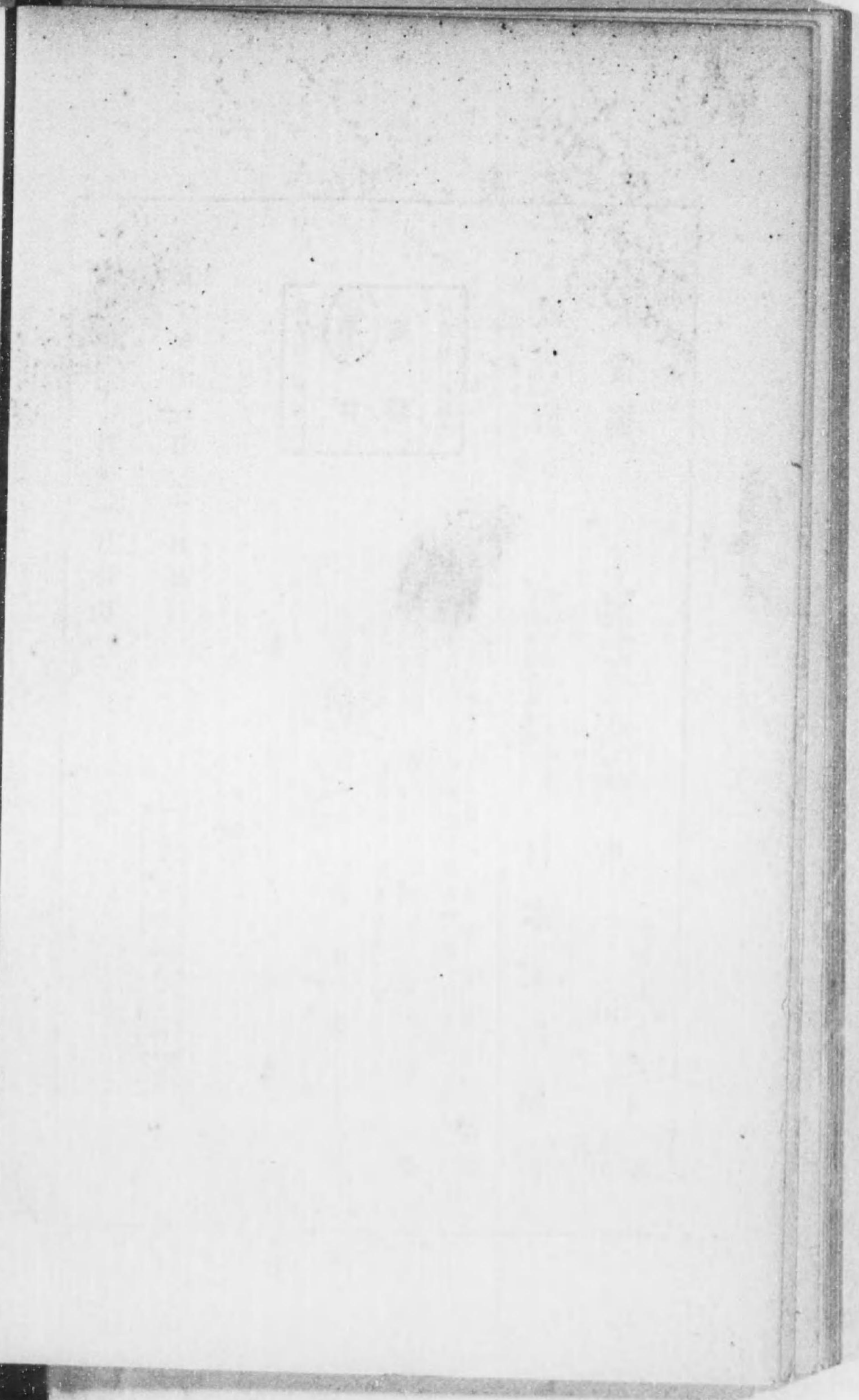
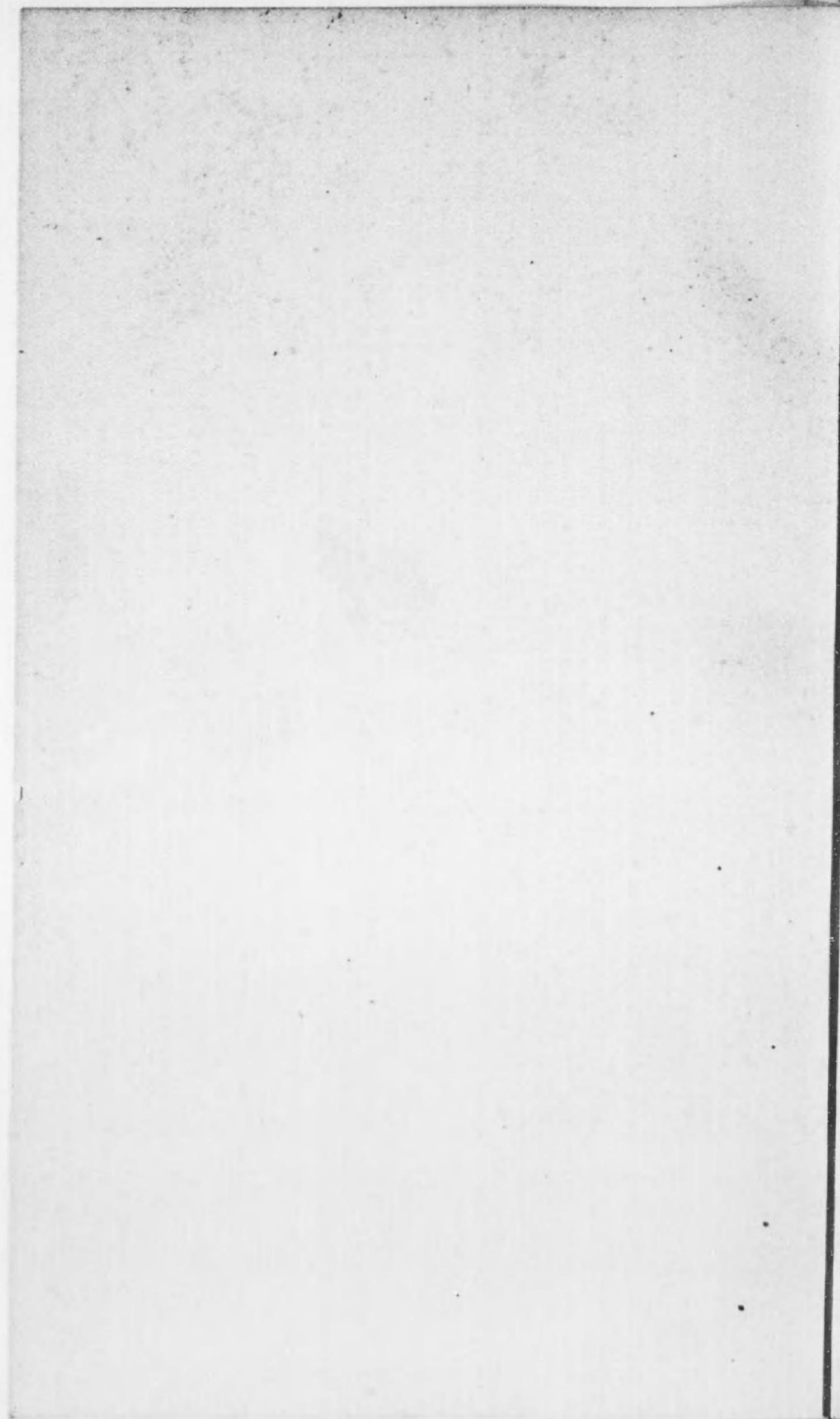
著者 芹澤登一
發行者 能見清次郎
印刷者 阿賀寬爾
印刷所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地
國光印刷株式會社

發行所
大賣捌

東京市四谷區南町八二番
電話九段二五九四番
東京市神田區表神保町
電話神田三〇六〇番

日本家政協會
東 京 堂
振替東京三五五三番
振替東京二七〇番





503
20

終